◀ 新書紹介 ▶

市民よ起ち上がれ

『都市づくり』

小森　武著

日本が開国し近代的国家として歩みはじめて以来，日本の都市は富国強兵のかけ声のもとに造られていきました。それは完全に国民不在，市民不在の，国づくり，都市づくりでした。戦後は新日本建設の名のもとに産業復興，都市復興が行なわれました。さらに都市は量的に膨張しさえしました。その結果は今日みるように，戦前の富国強兵のかけ声のもとに行なわれた国づくり，都市づくりとなんらかわらないものになってしまいました。文化国家建設，民主日本建設の名のもとに行われた施策は，経済偏重の国家施策であって，そのあらわれである都市建設が，市民不在の都市づくりになったのは当然といえましょう。その後の施策も，高度経済成長政策によって産業をますます優先させてきています。

本書はこれらの経緯を述べ，産業優先，高度経済成長政策がどうして市民不在の都市づくりになるかを非常にわかりやすく解明し，過大都市，公害，交通問題など様々な都市問題が，その結果生じていることを明らかにしています。

では，市民のための都市づくりはどうすればできるでしょうか。

本書の著者は，1922年，東京市長後藤新平の招きで来日し，東京市政とその事業を調査し，改善案を作成したC・A・ビアード博士の著「東京の行政と政治」の中のことばを引用しています。

『西欧では組織労働者が，すでに長年にわたって都市生活の改善をたたかいとる社会勢力となってきた。また，労働政党は，完璧な都市改善計画を発展させてきており，それらの政党は，小数党に甘んじている時でも，都市政策に強い発言力をもっているのである。』

『東京の婦人たちは，市政が自分たちの生活の領域とみなしている家庭の保健と快適と安全とに結びつくものであるということに目覚めていない。』

『選挙の制度はあっても，民衆の関心は，道路，下水，衛生，交通，過密居住やその他，市政上の主要な問題に向けられていない。』

著者は，現在も事態はかわっていないとし，市民のための都市づくりは市民こそやらなければ決してできない，しかもやる気があれば必ずできる。「市民よ起ち上がれ」と呼びかけで結んでいます。

都市問題の現象面のもとにあるもの，都市計画の技術的解決の以前にあるものをわかりやすく解明し，都市づくりは市民ひとりひとりの責任だということを，これほど説得力をもって書かれた本は少ないでしょう。＜高井＞

＜B６変型版　河出書房　現代の経済　第15巻　248頁　320円＞